

経済発展と幸福

西水 美恵子
Mieko Nishimizu

まず、どうして幸福を追求する経済発展を考えることが大切なのかということをお話ししたいと思います。そのあと、もし時間があれば、誰が何をどうしたらいいんだろうということをお話します。

経済発展ということに関しては、いろいろ考えていると思いますが、経済が発展していくために絶対になくってはならないものとは何かと考えたことはありますか。これがなかったら発展はないよというものです。私は平和だと思います。戦争を知らない私とか、聴衆のほとんどの皆さんもそうだと思いますが、私たちの世代にとって平和と聞いても空気のようなもので、実感がわかないかもしれないし、とかく忘れがちなことですね。でも、実際にアフガニスタンとか、セーラードとか、ブータンを除く南アジア諸国ほとんどの国で、いろいろなかたちの戦禍をくぐって同僚達と仕事をしてきましたから、そういう体験をするたびに、私の父母や祖父母の世代が大変な苦勞をして築いてくれた日本の平和。それがどんなにかけがいのないお宝なのかということを知りました。

理屈で言えば簡単ですが、どんなに素晴らしい経済政策があっても、どんなに膨大な投資をしても、その結果が破壊される、ないしは結果が長続きするという安心がなければどうしようもないわけです。元も子もない。平和なしには経済の健全で速やかな発展はないし、そんなに大切な平和のことを考えると、平和国家のその根源は何かということ把握しなければならないと思うんです。それが、私は私たち一人一人の、また、日本の国民の一人一人の幸せだと思うんです。

わが国の憲法は、公共の福祉に反しない限り、人権としてすべての国民が個人として尊重されて、それぞれ思う存分に幸福を追求することができることを保障しています。それが日本人としてここに生きる人権の非常に大切な基礎ですね。平和の源は、私とあなたと、私たち同朋の日本人の幸福追求の自由、これだと思います。

突飛なロジックに聞こえるかもしれませんが、人類の過半数は幸福を追求できる権利さえ味わったことがないわけです。ですから、この講堂にいる私たちは、全世界の人類でもまれな人間です。

発展途上国はもとより、日本とかアメリカとかヨーロッパ諸国のような先進国でも、貧しさ、貧困というものを市場経済が変化していくうえで、自然に起きる自然現象だと考えたらいけませんよ。大間違いですから。経済学者というのは、そういう感じを与える癖があるんですが、絶対に自然現象ではないんです。どんなに貧しい国でも政治の意思さえあれば、国民全員の貧困を最低限でも解消できる財源、力はあるんです。発展途上国でも、先進国でも、貧困というのは、私から見た場合、間違った政策や悪いガバナンスや汚職などがつくり、持続していく。権力者がつくった、要するに人がつくった現象なんです。その貧困は、放っておくと親から子へ、子から孫へ、孫から曾孫へと何世代も続いていく。それが例えば、インドの貧困の現状、ネパールの貧困の現状、アフリカ諸国の貧しさの現状です。考えてごらん下さい。一生このいまの貧しさから抜け出られないということ

だけではなくて、自分がどんなに一所懸命努力しても、子どもも孫もひ孫も、彼らの生活は自分の生活よりよくならないんです。どういう状態だと思いますか。想像できないでしょう。私もそれは体験するまで想像できなかったんですよ。初めて体験したときにそれを教えてくれたのが、私が心の母と呼ぶパキスタンの、未亡人なんです。ホームステイを通じて貧困、極貧の体験をするために彼女の村に入ってお世話になったときに、彼女の言った言葉。まず英語で言ってから訳しますね。

「This is not life. This is just keeping a body alive.」

これは人間が営む生活ではない。ただ動物のように体を生かしているだけ。

本当にそうなんです。朝から晩まで毎日、体を生かすためにだけ動き回っていて、人間じゃないんですよ。何世代も人間としての生きがい拒否され続けてきたそういう人々の鬱憤、想像できませんか。

私たち日本人、特にこの講堂に集まった方々のような恵まれた方々には絶対に想像できないと思います。私は一度それを経験しただけで気が狂うと思いました、本当に。特に若者がひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん、お父さん、お母さん、自分の世代にまで延々と続いてくる幸福追求の権利を拒否される。それも権力者に拒否されるという状態。そういうことを体験している若者の鬱憤と怒りというのは、過激な政治や宗教の温床になります。彼らは犯罪やテロ活動をはけ口にしている。世界中、そういう例はごろごろしています。今日現在、インドとネパールの国家安泰を脅かし続けるマオイストの活動。アフガニスタンとパキスタンの民を苦しめ続けるタリバン。元を正せば、いま私が言ったことです。残念ながら、私がお兄さん、弟と呼んだパキスタンの村の人たちもタリバンに入って、いまはもうこの世にはいません。だからこそ、国民の幸福を本気で追求する経済発展をやれという政治哲学であるGNHが大切なんです。これはもうダショー・カルマ・ウラがご説明なさいましたが、幸福を真剣に追求する経済発展というのはどういうかたちなのかと聞かれたときに、私はいつもこう返事をします。ブータンの計画省が1999年に発表した国家ビジョン「ブータン2020年」から引用するんです。「幸せへの鍵は、人間が必要とするある程度の消費満足と、非物的満足感、特に情緒や感情、精神的な満足にあるから、経済開発戦略は物的な次元と非物的な次元のバランスを保つ中道にあるべきだ」と。その「ブータン2020年」というビジョンは、こう宣言しています。「幸せを可能にする自然環境、精神的な文明、文化伝統、歴史遺産を破壊して、そのうえ、家族や友人、地域社会の絆までも犠牲にするような経済成長は、人間が住む国の成長ではない」と。同感です。私たち、いままで何をやってきたんですかね、日本という国をつくるために。

幸福を追求する経済成長は、富の配分を重視する成長であるとともに、最近、受け入れられてきたサステナビリティという、持続的成長を追求する発展と同じ性質と考えてもいいとダショー・カルマ・ウラはおっしゃいます。私も同感です。

では、誰が何をどうしたら幸福を追求する経済発展ができるんだろうか。世界中、いろんな国のことを学んできましたが、国家のトップリーダーが真剣に国民の幸せを追求してきた国というのは、人類の歴史上、ブータンしかない私は思っています。だからこそ、ブータンの先代国王、雷龍王四世のような方が、わが愛する日本の首相になってくれたらなというようなことを夢見たことがありました。一度、先代国王に、もうブータンをおやめになって日本のリーダーになってくださいと申しあげましたら、陛下に大笑いされた愉快的な経験もあります。そのとき陛下からたまわった大切な教えのなかで、もっとも大切だと思った教えをいただきました。雷龍王四世はこうおっしゃった

んです。「国家指導者に頼る国づくりはもろい。国づくりは、国民一人一人の仕事なのだ」と。長い間にわたって持続する国民の幸福追求と平和、それが本物であるためには、指導者が国民に与える静的な結果ではなくて、国民が自ら嬉々として参加してつくりあげていく動的なプロセスが必要なんだと。こういうことを学ばせていただきました。

はっきり言いまして、非常に残念ながら、わが国日本にはブータンと違って本気で国民の幸せを考える政治哲学はなきに等しい。けれども、日本にはブータンにないとても大切なものがあります。先見の明ある民間企業のリーダーたち。坂本光司先生の著書『日本でいちばん大切にしたい会社』、読んだことある方、手を挙げてください。少ないですね。必読ですので読んでください。あの本は、私がいま言ったことをはっきり示していると思います。あの本に紹介された中小企業には、たくさん会社の数はありますが、みんな一貫して本当に長い間、ぶれなく続く一つの経営信念があるんです。その理念は、社員と社員の家族の幸福追求を企業の最高使命とする。会社の持続的成長は、そのための手段であり、またその結果でもある。それが経営理念です、どの会社をとっても。ぶれないんです、20年、30年、40年ずっと続いてきている。坂本先生の言葉を借りるなら、「企業経営の第一義は、社員とその家族の幸福を追求し、実現すること」です。社員とその社員がもっとも大切にしている家族を路頭に迷わせてはいけないんです。だからこそ、成長し、継続しなければならないんです。

いま私が読んだ坂本氏の言葉の、社員とその家族を国民に置き換えてごらん下さいよ。カルマ・ウラ先生がおっしゃったGNHの考えと同じです。『日本でいちばん大切にしたい会社』は、それぞれ業者は違っても、幸福追求の経営を本当に、経営者が一心本気で続けて、驚くほど長い間、増収と増益を果たしてきて非常にダイナミックな発展をしてきた会社ばかりなんです。非常に難しいことです。ほとんどが地方の決して便利とはいえない立地条件にあって、それを不利とせぬどころか、地域社会のつながりを宝物として、その文化と歴史、自然環境の恵みを事業の糧として生かしてきた。ブータンとそっくりです。

『日本でいちばん大切にしたい会社』のなかで紹介されている企業は、私から見れば、みんなCSR、企業の社会的責任、を世に先駆けて40年、50年前から実践してきた会社ばかりなんです。そのCSR、企業の社会的責任追及というのは、国家経済の持続的成長のミクロ版です。だから、持続的成長の構造的な基礎でもあるわけです。ブータンの政治哲学、国民総幸福量は、その持続的成長の先駆けですから、『日本でいちばん大切にしたい会社』の実際のいままでの発展経過と、それからブータンのいままでの驚異的な発展経過、そのプロセスと結果が、いままでは似ているというのは不思議ではないです。当たり前なんです。それに必要なのは、ほんまもののリーダー。本気で、ぶれないで10年、20年、30年、ブータンの国王の場合は34年間。『日本でいちばん大切にしたい会社』の場合は40年、50年、戦前から戦後にかけて毎年増収、増益。難しいことです。

家庭でも職場でも、私たち一人一人、同じ人間です。だから、どちらかが不幸なら、どちらかに響くわけですよね。本気で幸せを追求して、それを国の糧とし、自分の糧としたいのなら、お始め下さい。自分の職場、自分の教室、自分の学校、自分の家族を幸せにする力はあなたたち一人一人にしかないわけです。会社なら、いろんな職場を『日本でいちばん大切にしたい会社』のような光った会社にする努力をすることが、幸福を追求する経済、国家の発展の源だと思います。それなしには空論ですから。それは、国のリーダーや政府に頼ることはありません。ブータン国王でさえで

きない。私たち、一人一人のセルフリーダーシップにかかっていることです。

雷龍王四世がおおせられたように、「国家指導者に頼る国づくりはもろい。国づくりは国民一人一人の仕事なのだ」。まったくそうだと思います。こういうことを日本に帰ってくるようになって、いろいろなところで出会う若い世代、そんなに若くない世代の有望な企業家、幸せを追求しうる経営理念をまっとうしている企業家に会うたびに、そういう人たちから、こういう結果が出るのかということを学び続けるたびに思うのですが、最近、幸せを追求する経済、それから社会の安定の可能性は、いまのところブータンよりもわが国日本の方が可能性としては高いと思えるようになりました。そのお宝、大切にしてもらいたいです。ありがとうございました。